



教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 16
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成29年(2017)9月1日

目次

- 《新連載》 データは語る (1)p.2
—授業評価アンケートの分析から知る授業のヒント!—
- 学生を学びに導く授業とは? p.6
—「学生が選ぶベストティーチング賞」受賞者に聞く授業のコツ—
- より質の高い授業とカリキュラムをめざして..... p.9
—平成28年度「学部FD推進事業」成果報告会開催レポート—
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力!学生のまなざし!(16)—」 p.15
—大人数教室・講義型で学生を魅了する授業とは?— 加藤季夫(人間開発学部教授)
- 名著探訪 —高等教育、この1冊(第8回)— p.18
- 教育開発推進機構彙報..... p.19
- そったくどうじ 啐啄同時 —編集後記— p.20

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

～授業評価アンケートの分析から知る授業のヒント!～

教育開発推進機構助教 戸村 理



中山：『教育開発ニュース』をご覧のみなさん、こんにちは。教育開発推進機構の中山郁です。今号からの『教育開発ニュース』では、「データは語る」と銘打って、新連載をはじめます。

これは主として教育機構が持っているさまざまなデータを読み解くことで、本学の教育の現状を把握し、読者のみなさんと一緒に考えていくきっかけを創ることができたら、という思いからはじめることにしたものです。第1回目となる今回は、戸村先生にお願いしてみました。



戸村：中山先生からありがたい(?)ご指名を受けてしまった教育開発推進機構の戸村理です。この新連載のキーワードは「データ」のようですので、私が担当する連載第1回目では、学生のみなさんに協力してもらって実施している「平成28年度後期学生による授業評価アンケート」のデータを利用したいと思います。ここから学生の視点からみた本学学士課程教育の現状について、みなさんと考えていければ嬉しく思います。

授業評価アンケートの回答状況は？

本学の授業評価アンケートは、前後期末にそれぞれ1回ずつ約1ヶ月間の回答期間を設けて実施しています。平成28年度後期のアンケートは、平成28年12月16日から平成29年1月23日にかけて実施しました。回答件数は22,453件で、回答率は21.4%でした。

回答した学生の学年は一番多かったのが1年生で

9,373件、他方で一番少なかったのが4年生で2,013件でした。2年生は6,442件、3年生は4,625件ということでしたので、学年順という結果になったようです。

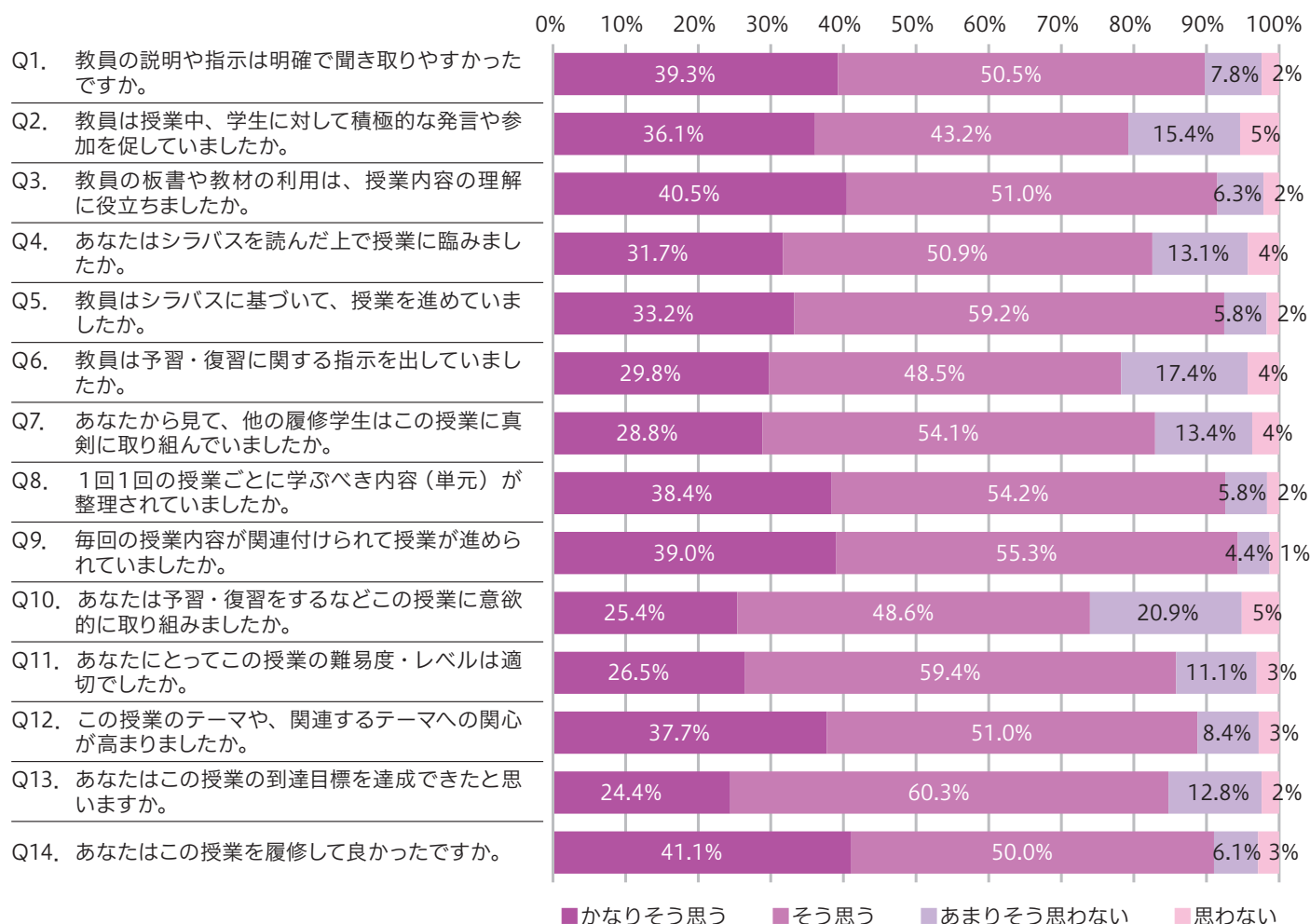
全体的な結果は？

授業評価アンケートの設問は、全部で17問です。設問1～14は4件法（「かなりそう思う」・「そう思う」・「あまりそう思わない」・「思わない」、のどれか1つを選択）で、設問15は授業1科目1回あたりの授業外学修時間を実数値で入力してもらった設問になっています。また設問16と設問17では授業の良かった点と改善してほしい点を、自由記述形式で入力してもらっています。

次ページにある図1は設問1～14の単純集計結果をグラフにしたものです。これをみると、ほぼすべての設問で、肯定回答（「かなりそう思う」と「そう思う」の合計）がかなりの割合を占めていることがわかってと思います。ですがこの結果だけで、「國學院大学の授業は全体的に素晴らしいんだ！ああ良かった！」としてしまっただけでは、アンケートに協力してくださった各先生、そして何よりも学生のみなさんに失礼です。中山先生からも「「データは語る」を連載する意味がないよ！」と怒られてしまうので、注意深く見てみたいと思います。

すると肯定回答が80%を下回った設問があることに気づきます。具体的には設問2「教員は授業中、学生に対して積極的な発言や参加を促していましたか」、設問6「教員は予習・復習に関する指示を出していましたか」、設問10「あなたは予習・復習をするなどこの授業に意欲的に取り組みましたか」などが挙げられます。設問4「あなたはシラバスを読んだ上で授業に臨みましたか」も、肯定回答が82.6%とやや低いです。それではこうした設問について、ほんの少しだけ掘り下げて見てみましょう。

図1 全設問の単純集計結果

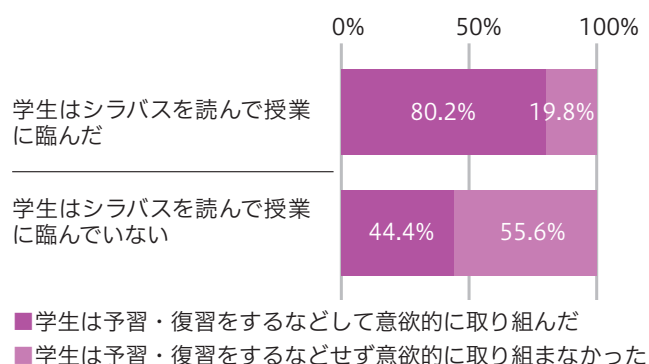


シラバスと学生の授業に対するかまえとに関係アリ?

紙面が限られているので、まずは設問4と設問10との関係性を見てみたいと思います。

図2は、設問4と設問10それぞれの肯定回答と否定回答を集約した上で、クロス表形式で集計したものを図示したものです。

図2 設問4と設問10とのクロス分析結果



これによると「シラバスを読んで授業に臨んだ」学生と、「シラバスを読んで授業に臨んでいない」学生とでは、「予習・復習を意欲的に取り組んだ／取り組まなかった」とに大きな差が見られました。前者の学生は、80.2%もの学生が意欲的に取り組んだと回答していますが、後者の学生は、44.4%の学生しか意欲的に取り組んだと回答していません。

一般に学生は、シラバスを読み、学ぶべき内容の概要を把握した上で履修登録を行います。したがって、シラバスを読んで授業を選択→履修登録→予習・復習を行って授業内容の理解に努める、というプロセスとなります。こうした考えに基づけば、図2の結果は、「シラバスをきちんと読み、授業で学ぶ内容をきちんと把握して履修登録を行った学生は、そうでない学生と比べて、毎回の授業での予習・復習に一生懸命取り組む傾向が見られる」と考えることができます。

しかしここで一つの疑問を思いつく方もいらっしゃる

かもしれません。それは、「シラバスを事前に読む／読まないに関わらず、もともと予習・復習を一生懸命取り組むような学生だから、シラバスも読んで授業に望んだのではないか」ということです。たしかにそのように考えることもできます。したがって、データが示した図2の結果の解釈が本当にこれで良いのかどうかには、より深い分析が必要となります。

教員の指示と学生の授業に対するかまえとに関係アリ？

では次に設問6と設問10とで、その関係性を考えてみたいと思います。

図3も図2と同様に、設問6と設問10それぞれの肯定回答と否定回答を集約した上で、クロス表形式で集計した結果を図示したものです。

これによると「教員が予習・復習の指示を出した」と認識した学生と、「教員が予習・復習の指示を出していない」と認識した学生とでは、実際に予習・復習をしたかどうかには、大きな差が見られました。前者の学生は、85.3%もの学生が予習・復習を行ったと回答したのに対し、後者の学生では、33.4%の学生しか予習・復習を行ったと回答していません。

私たちは、この結果をどのように解釈するべきでしょうか。先の図2では、解釈の可能性が2通りあることを指摘しました。今回の場合は一般的に考えて、2通りの解釈が可能である可能性は低そうです。というのも、「学生が予習・復習に取り組むそうだから、教員は学生に対して予習・復習の指示を出す」とは、考えにくいからです。つまり「教員が、(適切な)予習・復習の指示を出す」から、「学生

は予習・復習をする」という関係になると考えられます。

このように解釈すると、本学の学生は、教員が適切な予習・復習の指示を出しさえすれば、きちんと予習・復習に取り組む傾向にあるといえそうです。

なおそのように解釈した場合、教員が予習・復習の指示を出したにもかかわらず、予習・復習をしなかった学生とは、どのような学生であり、どのような理由によるのでしょうか。また教員が予習・復習の指示を出していないのに、予習・復習をした学生とは、これまたどのような学生であり、どのような予習・復習をしたのでしょうか。一つの分析結果は、次の疑問を導きます。やはり先と同様にさらなる分析が必要となります。

國學院大生の授業外における学修時間は？

ここまで設問1～14のうち、肯定回答が比較的少なかった設問に注視して、アンケート結果を概観してきました。最後はこれまでとは見方をちょっと変えて、アンケートに回答してくれた学生の皆さんの授業外における学修時間の実態を確認してみたいと思います。学生による授業評価アンケートでは、設問15で「この授業1科目1回あたりの授業外学修時間」を0～300分の範囲内で入力してもらっているため、その集計結果を見てみようというわけです。

集計の結果、國學院大生の授業1科目あたりの授業外学修時間の平均は、33.0分でした。さらに学生の所属学部別にみたのが図4です。文学部生は32.7分、法学部生は38.0分、経済学部生は32.4分、神道文化学部生は38.0分、人間開発学部生は25.2分でした。平均時間

図3 設問6と設問10とのクロス分析結果

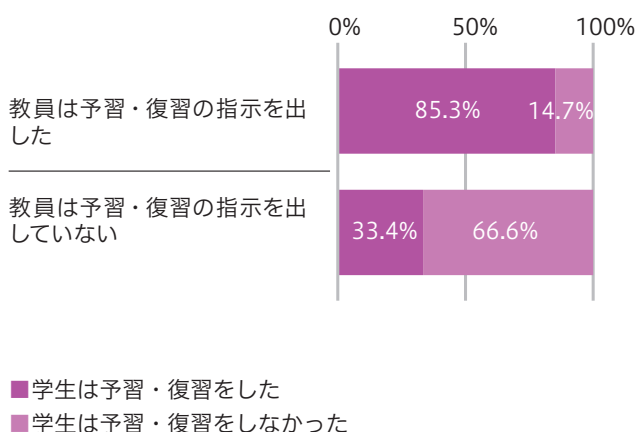
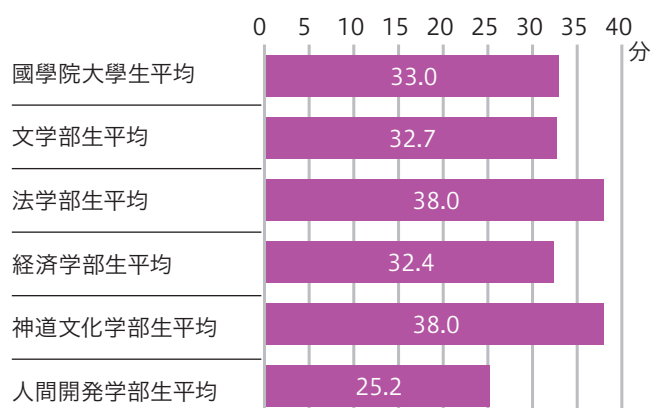


図4 学生の所属学部別にみた1つの授業科目あたりの授業外学修時間の平均



が最長の学部と最小の学部とでは、12.8分の差が確認できました。ただし平均値では全体的な特徴が分からないので、最後に分布も見てみましょう（図5）。

第一に、國學院大生の1つの授業科目あたりの授業外学修時間は、30分以内（「学修なし」「15分以内」「15分～30分以内」の合計）と回答した学生で70%前後（人間開発学部の場合は83%）を占めるということです。

第二は、どの学部においても、「15分～30分以内」と回答した学生が最も多くの割合を占めたことです。

第三は、「30分～60分以内」と回答した学生は、12%～21%とある程度の割合が確認できたものの、60分超となると極端に割合が小さくなったことです。その他にも読み取れることは多々ありますが、こうして分布を確認すると、平均値だけではわからない、國學院学生の授業外学修時間のさまざまな実態を理解することができます。

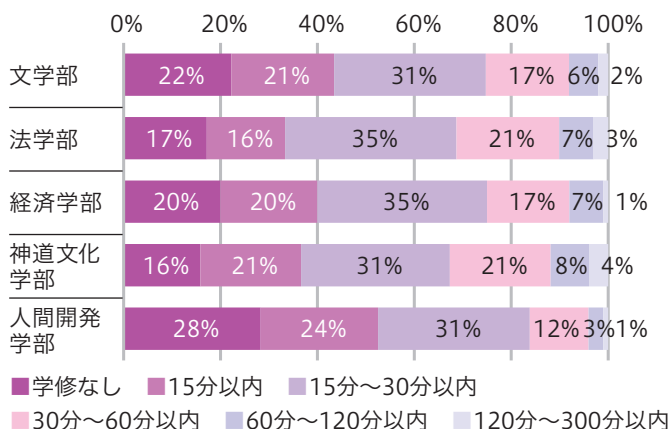
ところで教職員には周知の事実ですが、大学の授業（教育課程）を規定するものに単位制度があります。國學院大學の授業のほとんどは、90分講義を半期15回受講することで、2単位を得るという仕組みになっています。単位制度は「大学設置基準」という省令で規定されており、その第21条2で「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準」にするとされています。ここから2単位の場合は、90時間の学修が求められる計算になり、したがって授業1回あたりの学修時間は、90時間／15回＝6時間／回となります。ここでちょっとややこしいのですが、大学の授業では1時間＝45分とみなす慣行があります。そのためこの考え方に従えば、6時間＝270分となり、ここ

から授業時間の90分を差し引くと、単位習得には授業1回毎に180分の授業外学修時間が必要となる計算になるのです。

こうした単位制度の原理原則に従うと、図4～5で示した國學院大生の授業外学修時間の実態では、残念ながら問題があるという結果になってしまいます。ただここで「問題だ！だから学生にもっとたくさんの予習・復習を課すべきだし、学生もそれに応えなきゃダメだ！」と決めつけてしまうのはどうでしょうか。あくまでも私個人の考えではありますが、それは早計のように思います。というのもこの原理原則通りの授業外学修時間を徹底することは、現在の学生さんの実際の生活実態から判断すれば、難しいことは明らかです。アルバイト、サークル、通学時間などいろいろな要素から、すべての学生を一括りにみることはできないでしょう。

また問題は、学生の視点からだけではありません。教員の視点からも考えなければいけないことが多々あります。図3で示した通り、教員によっては適切に予習・復習の指示を出していない場合があるようです。この教員間の授業方針・設計に見られるバラツキをどのように考えるべきでしょうか。また仮に授業外学修時間が少ないにも関わらず、大半の学生が単位を修得できたとします。その場合は、成績評価の妥当性、授業内容の適切性についても考える必要があるでしょう。もちろん成績評価も授業内容も大学教育のスタンダードを満たしている場合も考えられます。その場合は、教員の教授法が極めて優れていると考えることも可能ですから、そのグッドプラクティスは共有することが望ましいでしょう。

図5 学生の所属学部別にみた1つの授業科目あたりの授業外学修時間の分布



ここまで「平成28年度後期学生による授業評価アンケート」のデータから、國學院大學の教育の現状に関する幾つかの側面を見てきました。本連載を企画された中山先生が冒頭で述べていたように、私も、さまざまなデータを読み解くことで、本学の教育の現状を把握し、國學院大學の構成員一人ひとりで一緒に考えていくことが重要である、と思っています。それもあって(?)、今回の誌面では、話題提供と問題提起にとどめました。「学生による授業評価アンケート」は、教員と学生との間における一つのコミュニケーション・ツールです。このツールを適切に利用することで、本学の教育改善に資する知見を提供できればと考えています。

学生を学びに導く授業とは？

～「学生が選ぶベストティーチング賞」 受賞者に聞く授業のコツ～

本機構教育開発センターでは、平成26年度から学部
の兼任講師の先生方を対象として、顕彰制度「ベスト・
ティーチング賞」を実施して来ました。受賞者は、その
年度の「学生による授業評価アンケート」の集計結果に
基づき、全体理解度・総合満足度の各基準で上位3名が
選ばれます。平成28年度からは基準を「全体理解度」
から「到達目標の達成度」に変えるとともに、本学専任
教員も受賞対象とすることとなりました。

平成28年度は以下の先生方が賞を受けられ、3月29
日に赤井学長より表彰状が授与されました。受賞された
先生方の授業に対する取り組みに心から敬意を表したい
と思います。



▲赤井学長と懇談する受賞者の先生方

平成28年度「ベストティーチング賞」受賞者

■到達目標の達成度

- 1 恩田哲也先生(兼任)「スポーツ身体文化ⅠA・ⅠB」
- 2 ザイオン、マーク・N先生(兼任)「English2」
「Advanced English」
- 3 高橋康輝先生(兼任)「スポーツ身体文化ⅠA・ⅠB」

■総合満足度

- 1 吉住香織先生(兼任)「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ」
 - 2 綿引光友先生(兼任)「教職論」「教職実践演習」
 - 3 長浜尚史先生(兼任)「スポーツ身体文化ⅠA・ⅠB」
- 同 矢部健太郎先生(専任)「史学基礎演習」「日本史特
殊講義」他



ところで、これらの先生方はいかに授業を構成し、運
営しているのでしょうか？そして、どのように学生たち
を授業にひきこんでいるのでしょうか？

それらについてぜひ知りたいと考え、今回の受賞者の
先生方のうち、最初の専任教員受賞者となった、文学部
史学科の矢部健太郎教授にインタビューをしてみました。

『関白秀次の切腹』(KADOKAWA、2016年)など、
研究者として既存の史料にあらたな光を当てることで
通説を覆し続ける矢部先生は、教員としてどのような
授業を展開しているのでしょうか？

矢部先生が目指す授業とは

—— 矢部先生、ベストティーチャー賞受賞おめでとう
ございます！早速ですが、先生の授業は学生の満
足度が大変高いのですが、先生が目指す授業とは、
ひとことで言えば何でしょうか？

矢部：そうですね、「学生が聞いて無駄じゃなかった、
役に立ったなと思える授業。」ですかね。そのた
めに歴史的な事象について、彼らが今まで知らな
かった見方や新しい説が学生に伝わり、考えても
らうことを重視しています。授業中に歴史上の通
説を紹介したうえで、これに対し現在自分の頭
の中で考えている新説を伝え、学生に考えてもら
います。「どっちの説に納得する？」と問いかける
わけです。期末試験でもそうした問いかけを問題
に出します。きちんと考えられた答えなら、私の
説に反対の答えを書いても、成績としても高くな
るのはもちろんです。

—— そうすると、知識の伝達よりも、思考をさせること

に重点を置いた授業構成にしているわけですね？

矢部：ええ。演習以外の講義型の授業も知識を伝えるだけではなく、考えさせるのが主眼です。学生たちが納得するようなことだけを伝えても仕方がない。正解がない課題に向かい合うことで学生たちは一回「考える」というフィルターをかけるようになってゆきます。演習もまた一緒に、学生が学んできた史料も、「こういう考え方もあるんじゃないか」というように、可能性と選択肢を示し、それをもとに学生が考えチョイスしてゆく。最終的にはアクティブラーニングと同じなんじゃないかなあ、基本的には。

学生の思考の幅を押し広げる工夫

——なるほど！学生達の思考の深まりが期待されますね。ところで思考を広げるといふ点についてはどんな指導や工夫をされているのでしょうか？これはとくに演習授業の運営方法も関わってくると思いますが。

矢部：演習では卒業論文の一部となる小テーマを各自で設定し研究・発表してもらっています。但し、すべてを学生に任せるのではなく、テーマによって「これは盛り込め」と、必要な史料や事象を指導するなど、大枠は教員の方で設定し、実際の発表内容は学生が作り込んでいきます。

また、その際に学生各自が発表で必ず使いたい史料を集めたコピー冊子『矢部ゼミ史料集』を作り、最初の数週間はこれをもとに史料購読を行います。学生たちはとかく自分の研究対象にしか関

心を持たないのですが、「毛利家文書」、「上杉家文書」など各自が関心を持つ史料を「矢部ゼミ史料集」で横並びにしておくと、学生たちは自分の所だけの興味ではだめだと気づいてきます。すると他の学生の発表や準備した史料が他人事でなくなり、積極的に発表者の史料の予習をしてくるようになります。

——深く狭く、から横への広がりですね？

矢部：ええ、以前のゼミでは最初から卒論を意識させて指導していましたが、今はそうではなく、2年生までは視野を広げて物を考えられるように指導しています。例えば戦国期の島津をやりたいという学生には、島津氏の勢力範囲に隣接する四国や西国関連の論文を読むように勧めたり、その前後の時代にも面白いものがあることを知ってもらうようにしています。それでテーマがガラッと変わる学生もあれば、また最初の関心に戻るものもあります。歴史現象をその「時代の特徴」というのなら、他時代のことを押さえ、それとの比較に基づいて考える必要がありますから、単に考えることよりも、視野を広げ、物事を見る底辺・裾野をぐっと広げることが大事ですから。

——そうすると、学生たちはどのような力がついてくるのでしょうか？

矢部：多面的にもものをみる力、今ある情報や事象をうのみにするのではなく、批判する力、そして物事を原因・経過・結果と、時間軸で考える力！です。法経などの実学ならば事象と結果・展望でしょうが、時間軸のなかで考えられるのが史学の個性で



▲「可能性と選択肢を学生がチョイスする授業はアクティブラーニングと同じじゃないかな」(矢部)



▲「学生には必ず敬語で話すことが良い関係性作りのコツ」(矢部)

あると思います。そして、自分の考えの根拠となる史料、すなわち証拠をそろえ、自分の考えを論理的に構築することができるようになります。

—— 情報を批判的に検討するというと、矢部先生の研究姿勢と重なりますね。

矢部：今までこうだ、と言われていたものを、史料をこう読んだらこれまでと異なった読みができる。僕の研究はそう。誰でも知っている歴史的な事象や史料を新しい視座から光を当てることでやってきました。例えば豊臣家滅亡から江戸幕府ができる過程については、本来近世史のジャンルで「徳川幕府成立史」として取り扱われていましたが、これを「豊臣滅亡史」としてみると見え方ががらりと違ってきます。さらに豊臣家の「五大老」とは、実は江戸時代に林羅山が言い出したことで秀吉の時代にそうした用語はなかった。では、当時はなんて言っていたんだらうね？など学生に語り掛けます。また、学外で講演がある際には、授業時にその内容を学生の前で、予行演習として話し、意見を聞いたりもしますね。

難易度の高低を織り交ぜた講義構成

—— なるほど、研究と授業が密接に関連しあっているのですね。ところで先生は専門の演習だけでなく、様々な学部の学生が集まる講義も担当されていますが、そうした講義系の授業ではどのような運営を心がけていますか？

矢部：全学オープン科目の「日本時代史」では、学部専門科目の講義と大体話すことは一緒ですが、ちょっと細かくに話すようにしています。そして授業中に解りやすい話と、高度で難しい話をジェットコースターのように繰り返しながら90分の講義を行っています。志向性が高い学生は難しい部分を聞いて考えるし、そうではない学生は解りやすい話の部分で関心を引き出せます。そしてなにより自分自身が面白いと考えていることを話しています。たとえ史学科じゃなくとも面白く聞けて、考えてもらえるように。あとは授業で学生を惹きつけるのはこっちの話術かな。

—— なるほど、他学部の学生も巻き込んでゆく講義構成ですね！

矢部：どんなところでも疑って考えてみることに、それは



▲「現象を時間軸のなかで考えられるのが史学の個性」(矢部)

他学部の学生も共通して身につけなければならぬんじゃないかな。大学時代は社会に出る前の最後のトレーニングの機会、自発的に物事を考えるトレーニングをしないと。じゃないと待ち受け人間になってしまう。自発的な思考に導くという点では史学も他学部も目指すべきものは同じなのではないかなあ。

●おわりに

史学科の授業というと、歴史への志向性が高い学生が集まるという印象がありました。しかし、矢部先生の目指す「役に立ったな」と思える授業、それは学生が自分の好きな知識を覚える場では決してなく、「多面的にものを見る力」「情報を批判する力」を鍛えるものでした。

そして史学ならではのディシプリンたる「時間軸で考える力」を身に付けてゆくものでした。わかりやすく言えば、専門分野のモノの観方に基づいた批判的思考力を養うのが授業の役割、ということなのでしょう。もし、そうであるならば、矢部先生の授業の考え方は、専門教育への志向性がそれほど高くない学部の学生への授業にも通じるのではないかと思います。つまり、学部専門教育における授業の真の目的は、そのジャンルの知識を伝えること自体にあるのではなく、ものごとの見方や考え方を訓練することにある、そう考えられるからです。

また、平易な内容と高度な知見を「ジェットコースター」のように繰り返す講義構成、これは往々にして平板になりがちな講義を活性化し、多様な学生を授業に引き込んでゆく良い方法であると考えられます。インタビュアーも早速マネをしたいものです。なにせ、良い授業方法を紹介するのは、みんなでマネするためなのですから！ 矢部先生、どうもありがとうございました。

(インタビュアー：中山)

平成28年度

より質の高い授業と カリキュラムをめざして

「学部FD推進事業」 成果報告会開催レポート



■はじめに

本学の「学部FD推進事業」は、学長のリーダーシップのもと、全学的規模で教育改善を促進するため、各学部におけるFD（ファカルティ・ディベロップメント）の取り組みに対して予算的支援を行う事業として、平成24（2012）年に開始されました。

実施4年目を迎えた27年度には事業申請・中間報告・成果報告の各段階について見直しを行い、事業全体のPDCAサイクル強化を図るとともに、新たに、事業の成果の学内外における共有・発信を目指した取り組みを進めることとなりました。「成果報告会」開催がその一つです。

今回は、28年度事業完了後にさっそく開催された第1回成果報告会の模様を報告します。

◆開催日時・会場・開催状況

平成29年3月10日（金） 13：30～15：30
渋谷キャンパス地下1階 02会議室
参加者数22名（教員20名、職員2名）



◆平成28年度採択事業 題目一覧

文学部	カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討
法学部	法学部におけるアクティブラーニング導入および初年次教育手法の研究
経済学部	基礎演習A・Bにおける外部評価を通じた授業改善
神道文化学部	学生に対する効率的なアンケート・学力調査ならびに有識者の外部評価による授業運営・学部運営の改善化
人間開発学部	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発

【1】文学部からの報告

カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討のためのアンケート実施（報告者：金杉武司教授）



文学部は、本事業において学部生を対象とする独自の授業評価アンケートを、平成26年度以降、継続的に実施・活用してきた。学科ごとに、授業やカリキュラムに対する満足度を測定し、その分析結果を学部内で共有・活用する取り組みである。28年度は、学部生1～4年生を対象として、独自に作成したA4サイズ1枚両面の調査票に記入させる方式をとり、その結果は業者による集計・分析を経て、文学部教務委員会の研修会で報告された。本年度は設問項目の改定に時間をかけたこともあり、実施は9月下旬～10月上旬と少し遅れたが、その後の分析と研修会は当初予定通りに遂行された。改定に際しては、テーマ別講義と全学オープン科目の満足度、授業の履修者数の多少、事前登録を要する科目の数についての項目が追加されている。

全体の傾向として、まず学科専門科目の満足度が61.7%と最も高く、テーマ別科目の40.3%がそれに次いだ。学生が特に重視した項目としては「授業のテーマに興味をもてること（90.5%）」「驚きや発見があること（78.9%）」「担当教員の人柄や考え方（75.4%）」となった。文学部生の専門志向の高さが推察される。一方で「卒業後の進路に直結していること（43.8%）」「授業の履修者数（25.8%）」は低く、意外であった。学生が授業の満足度を測る際に、履修者数をそれほど重視せず、むしろ授業形式や（過年度アンケートでは演習形式やディスカッション形式の授業に対する要望が多く寄せられている）、教員の教え方に注目していることが推察される結

果となった。

また、カリキュラムに対する学生の満足度は、全体としては42.0%から45.1%へ上昇している。これは、過去2年間継続してきたアンケートの結果を、学部教務委員を通じて各学科で共有・活用して来た成果と考える。

以上を踏まえた今後の展望としては、①学生の志向性に応じて専門性の維持発展に努める、②テーマ別講義科目の満足度の高さから推察される隣接領域への関心や、多角的学びを重視する姿勢にも対応できるよう、学科横断的カリキュラムの構築を模索する、③卒業後の進路や授業形態も無視し得ない要素として捉え、社会人にとって必須の基礎的かつ汎用的能力の向上を念頭においた改善を進める、等が考えられる。また、外国語文化学科では、少人数によるディスカッション形式の授業を重視した大幅なカリキュラム改定を次年度実施するため、今後はその成果も経年的に比較検証する必要がある。

本事業は、アンケートを通して、カリキュラムや授業の質に関する「教員の実感」と、授業を受ける「学生の視点」とを数量的に比較でき、かつ継続的实施によってその客観性をより高められるところに利点がある。また、検証結果を学部内で共有・議論することで、個々の授業レベルを超えた、学部学科レベルのカリキュラム・授業改善に広くその効果を及ぼすことも期待できる。同様の取り組みは全ての学部で等しく実行可能なものであり、その手法は、得られた知見や成果とともに、全学的に共有しうるものである。

【2】法学部からの報告

法学部FD推進事業一前提となる新カリキュラムの導入も含めて―（報告者：高橋信行教授）



法学部は、本年度事業の柱として、①アクティブラーニング導入、②初年次教育改革、③新カリキュラム導入に向けた検討、を立てており、当初計画では①②に重点を置いていたが、執行部との協議の結果、③に重点を移して実施した。すなわち平成30年度に予定されている新カリキュラム策定に向けて、実定法担当の教員と協議を重ね、その結果を踏まえて、民事法・刑事法・公法の三つの部門ごとに定期的なヒアリング調査と意見交換を実施し、その成果を3月の法学部協議会において、法学部全専任教員間で共有した。また、①についても、報告者の担当科目で「授業前の予習テストの実施」と「授業時のビデオ教材」の二つの取り組みを実施し、受講生にアンケート調査を行った。その分析から得られた知見も学部内で共有し、29年度に予定している初年次教育の制度設計に活用予定である。

重点課題を③に移したのは、①②のような取り組みは、実現可能かつ高い教育効果が見込まれる新カリキュラムの策定に支えられてこそ効果を発揮するという認識に基づく措置である。それ自体が教授法や授業の改善に直結するものではないが、学部教員の多岐にわたる継続的な協議のもと、法学部の実定法科目の全体の体系を、より具体的なものにできたことは大きな成果であった。また、昨年度から今年度にかけての事業推進を通して、個々の教員による授業改善と、学部全体によるカリキュラム改革とが「車の両輪」であり、PDCAサイクルに則った両者の同時並行的推進が必須であるとの認識が得られたことも大きい。

これらの取組みは、法学部のカリキュラムを前提として行われたものであるが、そのためのポリシーや個々の施策は他学部でも応用可能である。たとえば新カリキュラムでは、要卒要件の設定に際して、分野ごとの基礎的知識に関する専門科目については学生の選択余地を狭めつつ、より高次の専門知識に関わる専門科目については学生の選択余地を広げる方法を採用しており、これによって、一定の水準を維持しつつ、より学生の興味関心に即した科目履修を可能としている。このような策定方針は、他学部のカリキュラム検討に際しても役立つものであろう。その点において本事業は、学部・学科の別を超えた、大学全体のFD推進に資する知見を提供し得ていると言える。

【3】経済学部からの報告

経済学部平成28年度学部FD推進事業の成果—外部評価からみた基礎演習の課題—（報告者：細井長教授）



経済学部では、平成28年度から、1年前期必修科目「基礎演習A」・1年後期義務履修科目「基礎演習B」の全23クラスにおいて、アクティブラーニングの一形態としてのグループワーク授業を導入した。既に27年度にトライアルで15クラスにグループワークを導入し、各クラスに1名ずつFA（学生ファシリテーター&アドバイザー）を配置したが、同一内容で授業を行ったにもかかわらず、各教員・FA間における様々な「ばらつき」が目立つ点に課題が見出された。そこで、こうした「ばらつき」を低減して授業の質向上を図るべく、他大学で当該教育手法のコンサルティングを行い実績を挙げた外部業者に依頼して、授業内容や運営に対する第三者評価を行ってもらい、授業改善に役立てることを企図した。依頼内容は主として、①授業・会議の見学を行い、外部評価を実施する、②毎月1回実施予定の「基礎演習担当者会議」(教員・FA合同)において授業改善レポートを提出し助言を行う、③学期末に授業総括レポートを作成・提出する、の3点である。

事業は予定通り遂行されたが、残念ながら、申請当初期待したほどの効果を上げることはできなかった。要因としては第一に、「基礎演習担当者会議」における業者からの報告に際して学部教員の出席率があまり芳しくなかったこと、第二に、学期末の総括レポートについても、担当者全員に提示することが担当教員同士の軋轢を生む可能性があるとの配慮から、本年度は教務委員会内での共有にとどめたことが挙げられる。

このような限界はあるものの、28年度事業における成果として以下の点が挙げられる。まず、担当教員個人の実感や、個別授業のアンケートだけでは把握しづらい、全23クラス間における教員の能力・意欲の差に起因する「ばらつき」が、外部の「目」を通して、非常に明確な形で自覚されたこと。次に、同じく外部評価における指摘として、基礎演習の教育目標の明確化が不十分との課題が認識されたこと。そして、改善点を共有すること自体（担当者会議に出席しない／できない教員が多かったことからわかるように）かなり難しい状況があり、教員の意識や指導能力の改善だけでは、教員を「均質化」しての基礎演習運営は困難であることが自覚されたこと、である。

その一方で、FAの果たす役割については非常に高い評価が得られたことも注目される。無論、個々のFA間の能力差は存在するが、うまく育成・活用することによって、授業間の「ばらつき」を低減し、受講生の満足度を高め、授業改善を進めて行ける可能性が認識されたのである。

FAを活用する「基礎演習」の取り組みは、学生同士の「ピア・サポート」を通じて授業改善を促進し、学生の満足度を向上させる試みであり、学部として今後も継続を予定している。既に述べたように、教員「だけ」の意識改革では、「基礎演習」の授業改善は困難が伴うが、FAの活用によってそれらをフォローして行く可能性について認識された点はひとつの成果である。他学部においても、同様の取り組みを進める意志があれば、以上の認識と経験は有益な示唆を与えるものであろう。

【4】神道文化学部からの報告

学生に対する効率的なアンケート・学力調査ならびに有識者の外部評価による授業運営・学部運営の改善化
(報告者：遠藤潤准教授)

神道文化学部では、過年度の学部FD推進事業において、アンケート調査・学力調査を中心とした取り組みを行っており、その結果、卒業延期率の低減に効果が上がってきた。本年度以降も引き続き改善を図るとともに、修学状況の芳しくない学生への対応や、専攻科・別科の自己点検評価体制の強化に取り組むものである。



平成28年度学部FD推進事業は、学生を対象とする複数回のアンケートと、神道に関する学力調査、そして外部評価の3方面の取り組みから成っている。

まず、アンケートは、新入生を対象とする入学時アンケートとオリエンテーション終了時のアンケート、2年次の進路希望調査、そして卒業時アンケートの4種に加えて、院友神職会の補助費で運営している課外講座（書道講座など）においても随時実施した。それぞれ業者による集計を経て、学部でデータ分析を行い、随時学部教務委員会・学部教授会にて報告し協議を行った（卒業生アンケートは3月の卒業式の際に実施し、29年度に集計・分析を行う）。

次に、学力調査は、1年次開講科目「神道概論」(通年)において、新入生（編入生・社会人含む）を対象として、年度初めに神道に関する基礎学力診断テストを実施し、年度末に到達度調査を行うことで1年間の学修効果を測定し、多角的な分析を進めた。

これらの取組みは、学部学生の学力傾向と1年間の習熟度を把握する上で有効であり、結果は「神道文化基礎演習」「神道概論」等の初年次教育科目の検討に活用されている。特に「神道文化基礎演習」は、27年度は一部クラスにて、28年度は全クラスにてグループ・ディスカッション手法を導入し、担当教員の報告・アンケート調査結果・アイスブレイクの状況等を踏まえた検証・改善に努めている。

外部評価は、神道・宗教に関する大学教育を熟知している研究者を招聘し、学部カリキュラム・運営のあり方・学部行事に関する基本資料を閲覧していただいた上で懇談会を行う試みである。本年度は皇學館大学の櫻井治男教授をお招きして29年3月1日に懇談を実施し、多岐

にわたる意見交換がなされた。特に、評価者による学部ウェブサイトの分析を通して、内部者の視点だけでは得られなかった指摘や気づきが得られたことは大きな成果であった。

本事業の有する汎用性については、以下4点を指摘したい。①初年次教育における、アイスブレイクから前期の「神道文化基礎演習」への流れの構築の試み、およびアンケートによるその効果検証の有効性。②継続的にアンケートを実施することで、学年ごとの特性についても、おぼろげながら数値的に把握できる可能性が見えてきていること。③アンケート実施手法の一選択肢として、ワードで製作した質問紙を用いる方法が、コスト的・時間的に負担が少なく、汎用的に応用できることを確かめたこと。④外部評価によって、ウェブサイトが単に広報のためだけでなく、学部の活動を〈これからの学生〉に伝える手段であるとともに、在学生への教育の補助手段として活用できる可能性について示唆が得られたこと。以上の諸点は、学部を超えて全学的に共有可能な知見であると考えられる。

【5】人間開発学部からの報告

「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発（報告者：伊藤英之助教）



人間開発学部の事業目的は、「人づくりのプロ」を育てるために、学部教員が何を指導すべきか、どのようなカリキュラムとすべきかを、特に教職課程に着目して明らかにすることにあった。27年度学部FD推進事業の成果と課題を踏まえて、各学科がテーマ設定を行い、事業を推進した。

（1）初等教育学科

「初等教育教員養成における初年次教育の役割——導入基礎演習・総合講座で初等教育学科学生は何を学んでいるのか？」とのテーマを設定した。導入基礎演習受講前の段階での「大学生活不安」「コミュニケーションスキル」「社会考慮（マナーの基礎概念）」について調査を実施し、その結果を踏まえて、導入基礎演習と総合講座がこれらのスキル向上にどの程度の効果を及ぼし得たかの効果検証を行った。これらの技能に対する学生のニーズの高さは、27年度学部FD推進事業のアンケート調査で確かめられており、それを承けての取組みである。

具体的には、小学校の教育現場から身につけることが望ましいとして提示されていた「礼儀作法・マナー、コミュニケーションに関する技能」を初年次教育のシラバスに加え、効果検証を実施した。その結果、導入基礎演習と総合講座において、学生の当該技能における向上の傾向が認められた。また、その要因についても取得されたデータに基づいて議論を重ね、各教員が初年次教育の取組みを省察し、改善点を検討することができた。

（2）健康体育学科

「教育実習生が実習までに持つべき資質・能力とは？」というテーマを設定した。現職の中学・高等学校の健康体育科教員に質問紙調査を行い（教育実習の実施校や教育インターンシップ実施校を中心に）、その結果から教育実習の事前指導に必要な内容を検討した。その結果、特にコミュニケーション能力、それも単に挨拶や日常会話のみならず、授業において技術的な助言や指導を交えて生徒との関わりが持てるようなコミュニケーション能力が求められていることが判明し、基礎的な知識の習得やその伝え方などを指導内容に加えて行くことの必要性が認識されるなど、今後の指導方針を考える上で有益な資料を得ることができた。この結果については協議会において議論を重ね、教科教育科目と各科目間とで学修内容やカリキュラムをリンクさせて行くべきこと、実技科目の運動方法基礎実習から指導法実習への流れの方針を再検討すべきこと、非常勤講師に対する学修内容についての依頼のあり方を今後議論して行くべきこと、等が確認された。

(3) 子ども支援学科

教育実習後の指導の在り方を模索し、また実習生の効力感の向上を実現するため、実習後の効力感と事後指導後の効力感との関係について調査・分析を行った。27年度学部FD推進事業の調査では、事前指導の習得度と、実習における自己評価との関連は見られたものの、効力感についてはどの項目とも相関が見られず、先行研究で示される効力感の値よりも本学の学生が低い傾向を示すことが課題として認識されていた。

調査の結果得られたデータとそこから見えてきた成果・課題については、次年度のシラバス改善・指導内容・指導方法改善に役立てて行く方針である。特に、各養成校の学生の実像に合わせた明確な人材育成像の認識が肝要であることや、実習とカリキュラム全体との整合性の保証、またこれらの方針・施策についての教職員間での共通認識の形成が重要であることが確認された。



以上の、各学科における研究結果については、協議会の開催を通して学部で共有した。加えて、外部講師を招いて協議を行う協議会も開催している。事業で得られたデータ・知見は、教職課程科目や関連の専門科目及び教養科目を指導する上で、学部学科を問わず共有可能なものである。特にコミュニケーション能力については、教職にとどまらず、社会人にとっても不可欠な能力であることを考えると、専門教育が本格化する前の早い段階で意識づけるような指導を行っていくことが一層望まれよう。

■おわりに

5学部からの報告に際しては、それぞれフロアとの間で質疑応答が交わされ、参加者からも有意義な開催であったとの声をいただきました。ただ、開催日程のタイミングが学内の諸会議等と重なっていたため、全般的に参加者が振るわなかったことは残念であり、今後の課題となりました。

平成29年度は、従来の「学部FD推進事業」に加えて、教務部所管の「特色ある教育研究」を教育開発推進機構に移管し、有志教員による学部横断型プロジェクトに対する予算的支援を行う「グループによるFD推進事業」としてスタートさせました。年度末にはその成果報告会も併せて開催予定です。各学部教員に対する参加の呼びかけと、情報共有を一層進め、有益な諸成果・諸知見を全学的な授業改善の営みに繋げられるよう、今後も制度の運用・検証・改善に努めて行きたいと思っております。

本記事作成に際しては、主として、各学部実務担当者が作成した「平成28年度学部FD推進事業報告書」の記述に基づき、事業の概要・成果・共有できる知見を要約して紹介しました。改めまして、各学部の担当者の先生方に御礼を申し上げます。

同報告書は、成果報告会で配布された諸資料を併せた資料集として学内で共有され、その概要部分は大学ウェブサイト上で的一般公開も予定しています。(担当：小濱)

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（16） —



大人数教室・講義型で学生を魅了する授業とは？

近年、高等教育の世界では「アクティブラーニング」という用語に代表されるように、能動的な学修スタイルが広まってきました。しかし、「能動的」とは、学びのスタイル（形式）ではなく、学生の学修の質を指すものであります。とするならば、少人数でグループワークを行う授業でなくとも、大人数の講義科目でも能動的な学修を提供することは可能はず…いや、すでに本学ではそうした授業実践を長年続けてこられた先生がいらっしゃいます。それが今回紹介する人間開発学部に加藤季夫教授です。

今回は加藤先生に、大人数での講義運営のツボについて語っていただきました。



教員の授業努力

「人類学入門」

「環境と技術」

加藤 季夫

（人間開発学部教授）

▲加藤先生と授業の「ゲスト」たち

私が担当している科目は、たまプラーザキャンパスで開講している「導入基礎演習」、「理科実験・観察基礎論」、「生物学概説」、渋谷キャンパスで開講している教養総合科目のテーマ別講義科目または専門教養科目がある。教養総合科目では、人の過去に関する「動物の歴史とヒト

への歩み」、人の現在に関する「生物の生存・繁殖戦略と脳」、人の現在と未来に関する「命を支える水と食料」のテーマでそれぞれ講義形式の授業を行っている。大学での学修は将来に直結する専門分野だけでなく、人として生きていくための知識や思考を身に付ける教養総合科目も必須で、それが多様な視点を培い、自ら判断できる人を作り上げることの基礎となっている。

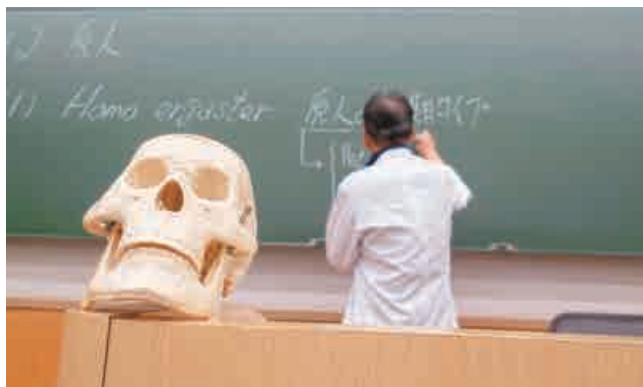
今回紹介する「動物の歴史とヒトへの歩み」は、地球46億年の歴史を振り返り、ヒトという生き物がどのように出現し、現在に至っているかを半期15回で考えていく授業である。

授業のサブタイトルは「世界は一つ、人類皆兄弟」で、人種差別や民族差別が如何に無知の人間のすることかが理解できれば、授業の目標にほぼ到達したといえる。

この授業は受講生が500名を超えており、このような大人数授業を円滑に運営するに当たって重要なことは90分の授業にメリハリをしっかりとつけることである。

そのために以下の①～⑤を実践している

- ①最初に5分程度前回の授業の復習を行う⇒授業内容の流れをしっかりと押さえることができる。
- ②板書はきっちり行う⇒黒板に書かれたことをノートに書くことにより、授業に集中できるようになる。書くという作業は大学では軽視されがちであるが、大人数授業において学修効果を高める極めて有効な手段であるといえる。もう亡くなられたが、*高瀬教授の「天文学」の授業は板書が多いことが有名で、書き過ぎで腱鞘炎になる学生が続出したが、受講生からの授業満足度は極めて高く、模範授業の1つといえる。
- ③前回の授業の復習の後、授業プリントを毎回配布する⇒プリントを配布しながら、学生の様子を把握し、それに応じて授業を柔軟に展開していく。
- ④できるだけ映像を用いる⇒ほぼ毎回、長短はあるが映像を見せるようにしている。映像を使うことにより、最新の情報も提示できる。
- ⑤ゲストを登場させる⇒学生の集中力が落ちてきたらゲスト



▲板書の字は手のひら以上の大きさに
手前のドクロも授業の「ゲスト」さん



▲聞き取りやすい速さと声の大きさとで講義



▲学生の様子を見ながらプリント
配布



▲満を持してゲスト(ドクロ)登場!

トを紹介する。ゲストは「アノマロカリス」、「三葉虫」、「アンモナイト」、「ティラノザウルス」、「オランウータン」、「人体骨格」などの縫いぐるみ、プラモデル、化石、標本。

最後に、もっとも重要なことは教員が楽しんで授業を行うことにある。幸い國學院大学の学生は専門外の自然科学系の授業でも熱心に受講してくれているため、毎回楽しんで授業を行えることに感謝している。

※高瀬文志郎教授、1984年～1994年まで本学で教鞭をとった。

学生のまなざし

学生たちは加藤先生の講義をどのように感じているのでしょうか。今回は受講生に加え、第三者的な立場から授業をみることが出来る立場にあるノートテイクさんたちにも意見を聞いてみました。

受講学生からのコメント

伊東 諒さん (文学部 史学科 2年)



加藤先生は取り扱うテーマもあるかもしれないが、学生が興味・関心を引き寄せられる授業を行っている。毎回、テーマ提示→講義→ビデオ視聴→解説→講義→まとめと同じ流れで授業が展開されていく。また、1つのテーマを1回の授業で終わらせるため、受けている側も飽きない。授業構成だけではなく、先生の話術も長けている。程良いテンポと話題の取り扱い、時にはジョークも混ぜて笑わせるなど聴いている側を楽しませてくれる。ただ授業が

面白いだけでは終わらない。先生は板書をしてくれるものの、図やポイントが中心であるので、テストに向けて授業のまとめをするなど復習は必然だ。このように授業だけで終わることなく、自然と復習もさせることで理解を深めさせ、興味・関心をより引き寄せさせている。先生の長年の経験が今日の授業に生きており、意図的というより自然と面白い授業を行っているのではないかと思った。とくに教職を目指す学生はぜひ先生の授業を受講し、授業作りのコツを学んでほしい。



▲わかりやすく、ユニークな配布プリント

ノートテイクからのコメント

菊地美弘さん (文学部 日本文学科 4年)

私は受講生としてではなく、ノートテイクとしてこの講義に参加しています。加藤先生の講義はとても興味深いお話が多く、テイクをしながら新しい知識がたくさん増えるため、私自身講義に入るのを毎回楽しみにしています。ノートテイクの視点でこの講義に参加する中で、気が付いたことがありました。それは、板書とレジュメが整っていることです。当たり前のように思われるかもしれませんが、この2つがきちんと揃っている講義は意外と多くはありません。大事なポイントは板書で伝え、レジュメによる説明もあるため、受講生も理解が進むのではないのでしょうか。また、講義内容に関連する映像を見せてくださることも、リアリティーを持って理解を深



めることに繋がっていると感じます。毎回楽しく講義を展開して下さるため、教室内の雰囲気も楽しく、そんな教室の空気も可能な限りテイクで伝えることができればと思います。

須田愛加さん (文学部 日本文学科 3年)

外国の地名や人物名など、タイピングで私が苦手とするカタカナが多く登場する授業でしたが、配布資料や板書を見ながら聞き慣れない単語でも漏らさずに拾うことができました。1つの話題ごとに黒板に要点をまとめてから、内容を噛み砕いて説明して下さるので、どのお話もノートテイクとして文章に起こしやすかったです。説明では、一文ごとの区切りや間がはっきりとしているため、聞き取りに余裕が生まれ、遅れることなく打ち込みができたのだと感じています。重要な点が短く繰り返されるところも大きかったです。また、授業の中盤から終盤で映像を流して、言葉で聞くだけではイメージの遠かったものを目で確認する機会がたくさんありました。映像の速さに追いつくのは大変でしたが、教室全体が集中し直す時間であり、私も気持ちを新たにして臨んでいました。そのように様々な角度からの情報が充実していたので安心感があり、落ち着いてノートテイクをすることができたと思います。

名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第8回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。

● 文書の書き方が変わる！ 読んでもらうための文書を書くための一冊



木下是雄「理工系の作文技術」
(中公新書624 中央公論社1981年)

本学の学生の多くは、この書名を見て「自分には関係ないな」と思うかもしれない。著者は、本書の読者を「ひろい意味での理科系の、わかい研究者・技術者と学生諸君だ。」と想定している。しかし、その内容は文理の別を問わない。むしろ文科系を自負するものこそ、この本との出会いは己の書いた文書を見直す良い機会になるだろう。

本書であつかうのは、「仕事のため」あるいは「勉学のため」の作文技術である。読者に対して、自分が調べたことや考えたことを正確に伝える文書が書けることは、大学での勉強はもとより、社会人になってからも必要な技術である。

本書に述べられる作文技術は、読んでもらうためにはいかに書くべきか、を徹底的に追求している。文書の構成、事実と意見を分けて述べること、わかりやすく簡潔な表現を心がけること等について、多くの紙面を割き、例文を挙げながら説明している。

例えば、よく知られた文書構成として「起・承・転・結」があるが、本書は「序論・本論・結論」の構成にすべきだとしている。なぜなら、レポートには、盛り上がりや意外性ではなく、問いと答えおよびその答えを引き出すための裏付けが求められるからである。また、事実と意見を分けて述べることについては、事実を述べている文と意見を述べている文の分け方を、例文をあげて丁寧に解説している。さらに「事実の裏打ちがあつてはじめて意見に説得力が生まれる」と、執筆者の意見の根拠になっている事実だけを具体的、かつ、正確に書くことを求めている。表現については、「不要なことは一語でも削ろうとするうちに、言いたいことが明確に浮き彫りになってくるのである。」として、文を短く、簡潔にすることで誤解のない文書になることを強調している。他にも「～であろう」や「～と思われる」という明言を避けた表現や、「～される」等の受け身表現の曖昧さを排し、「～だ」、「～である」や、「～が～した」という明確な主張をすべきだとしている。

以上のような巨視的・微視的な点から、内容を明確に伝える文書に何が求められるのかを解説している。レポート課題で良い成績を得られなかった学生は、本書に示された方法を念頭において自分の書き方を見直してみるとよいだろう。たとえどれほど丁寧に調査をし、考察を積み重ねたとしても、文書の表現や構成がまずくてその成果を伝えられず、結果として読者に理解を得られないこともあるからである。

初版は、1981年9月25日。私の手元にある2016年3月15日版は81版を数える。長い年月を経て多くの人が手に取った、紛れもない名著と言えよう。本書の内容は決してやさしいものではないが、得られるものは大きく、かつ、その後の仕事にも大いに役立つ。志ある学生はぜひ手にとって読んで欲しい。また、先生方からも学生に勧めてほしい一冊である。



木下是雄「レポートの組み立て方」
筑摩書房 ちくま学芸文庫1994年

本書も、『理工系の作文技術』と同じ著者によって書かれたが、こちらは内容を人文・社会科学系に寄せている。両書とも、大学でのレポートや卒業論文執筆の際はもとより、就職後に書く「仕事の文書」執筆にも参考になるだろう。これらが述べている「作文技術」は、一過性のものでなく今後の社会人生活に大いに資するものであると信じる。ぜひ、学生にはどちらか一書を手にとっていただきたい。

(鈴木崇義)

教育開発推進機構彙報

(平成29年1月1日～6月30日)

※肩書きは等は当時のもの

行事

○催事

[平成28年度]

2月18日：平成28年度教育開発シンポジウム

「学士課程教育における共通教育一次なるステージへ」

第1部・基調講演

「学士課程教育における共通教育の質保証：カリキュラムの方向性と成果アセスメント」山田礼子氏（同志社大学高等教育・学生研究センター長、社会学部教授）

第2部・シンポジウム

「RIKKYO Learning Styleにおける全学共通科目」佐々木一也氏（立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長、文学部教授）

「基盤教育の改革と東洋大学スタンダード」神田雄一氏（東洋大学副学長、教務部長、理工学部教授）

「國學院大學の共通教育改革：課題と展望」大久保桂子氏（國學院大學副学長、教務部長、共通教育センター長、文学部教授）

総括討論

司会 柴崎和夫氏（國學院大學教育開発推進機構長、人間開発学部教授）

3月10日：平成28年度「学部FD推進事業」成果報告会

3月29日：平成28年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」授賞式

○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

[平成28年度]

1月11日：第6回教員就職ガイダンス（3年生）

1月13・16・18日：第2回学修支援講座

2月2・3日：教職ゼミ生（総合・専門）対象広尾中学校授業見学演習

2月6～17日：教員就職支援春期集中講習会

3月7～15日：第2回学内教員採用模試（自宅受検）

3月8・9日：LLC TOEIC[®]直前準備講座：最後の旧型式IP対応（2回）

3月8～10日：教職合宿 於国立青少年オリンピックセンター

[平成29年度]

4月6日：教員就職直前ガイダンス（4年生）

4月6日：前期教員就職ガイダンス（2年生）

4月12日：第1回教員就職ガイダンス（3年生）

4月12・14・19・21日：LLCガイダンス（渋谷）

4月16・23・29・30日・5月1日：教員就職支援直前集中講習会

4月18・19・20日：新潟コメ作りワークショップ説明会

4月19日：スクールボランティア説明会

4月～5月：教員採用試験説明会（各教育委員会）

4月～6月：教員就職支援前期教育小論文講習会（全8回）

4月28日：LLC TOEIC[®]問題体験会（渋谷）

5月9・10日：渋谷まちあるきボランティア説明会

5月10・17・24日：LLC TOEIC[®]講座（渋谷）

5月11・22・25・29日：LLC TOEIC[®]講座（たまプラーザ）

5月12・19・26日：LLCアカデミック・イングリッシュ（渋谷）

5月13・14日：新潟コメ作りワークショップ（田植え）

5月20日：学内TOEIC[®]IP試験（第1回）

5月23・24日：新潟コメ作りワークショップ草取り説明会

5月～6月：LLC シンプル英会話（渋谷キャンパス：計12回、たまプラーザキャンパス：計15回）

5月～6月：教員就職支援前期教職総合ゼミナール（全12回）

5月～7月：教員就職支援一次試験対策指導会（全40回）

6月1・5・8・12・15・19・22・26・29日：LLC TOEIC[®]講座（たまプラーザ）

6月7・14・21日：LLC TOEIC[®]講座（渋谷）

6月9・16・23日：LLC アカデミック・イングリッシュ（渋谷）

6月12・14・16・21・23日：LLC NetAcademy2ガイダンス（渋谷、たまプラーザ）

6月24日：新潟コメ作りワークショップ（草取り）

6月24日：私立学校教員就職ガイダンス・東京都私学適性検査学内説明会

6月28日：平成29年度前期アカデミックスキル講座

6月28日：第2回教員就職ガイダンス（3年生）

学生スタッフ研修会・打ち合わせ会等

[平成28年度]

1月21日：後期ノートテイク報告会

2月7日：平成28年度後期SA最終報告会

2月7日：学内ワークスタディ報告会

3月24日：ノートテイク研修会

3月24日：ノートテイク研修会・平成29年度ノートテイク説明会

3月25日：平成29年度SA応募者対象説明会

[平成29年度]

5月24・27日・6月3・24日：パソコンノートテイク研修会

5月24日：パソコンノートテイク研修会（たまプラーザキャンパス）

6月5日：ノートテイク研修会

6月7日：SA中間報告会

FD活動、教育支援

[平成28年度]

2月22日：第3回「英語による授業運営」のためのFDワークショップ 講師：マーク・シュロズブリー（東海大学国際教育センター 准教授） 於渋谷キャンパス

[平成29年度]

4月1日：平成29年度第1回新任教員研修

6月14日：平成29年度第2回新任教員研修

出張等

[平成28年度]

1月18日：JPFF幹事校・会員校ミーティング 於立命館大学東京キャンパス（中山・佐野）

1月19・20日：長野県教育委員会、長野県私立学校訪問（坂入）

3月4日・5日：大学コンソーシアム京都 第22回FDフォーラム「大学の教育力を発信する」参加 於京都コンサートホール・教養教育共同化施設「稲盛記念会館」(中山・小館・佐野)

3月5日：大学英語教育学会JACET言語教育エキスポ参加 於早稲田大学（松岡）

3月7日：関東圏FD連絡会 於青山学院大学（柴崎・小濱・戸村・仙北谷・佐野）

3月10日：第1回大学教育イノベーションフォーラム「SD義務化と大学の未来～全教職員の能力開発を組織開発につな

げるために～」(東北大学大学教育支援センター) 於東京国際会館（中山）

3月9・10日：「ALPSプログラム」履修証明プログラム（一部試行）「学生・学修の理解」コース・「教育方法・教育評価」コース受講 於千葉大学アカデミック・リンク・センター（佐野）

[平成29年度]

6月3日：JPFF幹事会・会員総会・パネルセッション出席 於中央大学（新井・中山・佐野・大橋）

6月10・11日：大学教育学会第39回大会出席 於広島大学（中山・戸村）

6月16日：獨協大学外国語教育研究所第7回公開講演会「私の考える大学の外国語教育：鳥飼玖美子氏」(松岡)

6月17日：グローバル人材育成教育学会第4回関東大会出席 於中央大学（松岡）

6月24日：アルク情報交換セミナーvol.14「大学のグローバル戦略における英語教育のあり方」参加 於アルク市ヶ谷本社（松岡）

6月30日：関東圏FD連絡会 於法政大学（仙北谷・原田・佐野）

情報発信

- ・高等教育TOPICS配信（毎週月・木）
- ・教育開発推進機構ウェブサイトよりセミナー等情報発信（随時）

刊行物

[平成28年度]

2月：『教育開発ニュース』Vol.15

2月：平成27年度『授業評価アンケート分析報告書』(Web公開)

3月：『教育開発推進機構紀要』第8号

そつ たく どう じ 啖 啄 同 時

— 編集後記 —

本号より新たな連載「データは語る」が始まりました。客観的な数字の分析を通じて本学の教育を見つめなおし、教職員・学生と共有することができればと考えています。また、昨今大学教育の現場では「アクティブラーニング」が流行していますが、今回はあえて大人数講義や演習型授業の好例を紹介させていただきました。なぜならば、アクティブラーニングとは、グループワーク等を用いた授業のスタイルを意味するものではなく、本来は学生の学修活動の促進を図るものです。とするならば、教員のひと工夫で講義や演習でも学生を能動的な学修に導くことは十分可能なはず。そうした授業の事例を読者の皆様に示すことができればと考えた次第です。こうした授業のひと工夫の積み重ねによって、より素晴らしい学びの場を作って参りましょう！（中山）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第16号 平成29年9月1日発行

発行人 柴崎和夫 編集人 中山 郁

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28